

国境の人びと : 中国南北における人の移動と交流

著者	塚田 誠之
雑誌名	民博通信
巻	126
ページ	2-3
発行年	2009-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10502/4552



国境の街（憑祥市弄懷）。（撮影：塚田）

国境の人びと

—中国南北における人の移動と交流—

塚田誠之 文

つかだ せいゆき

先端人類科学研究部教授
専門は中国民族史

著書に『壮族社会史研究：明清時代を中心として』（国立民族学博物館研究叢書3 2000年）、『壮族文化史研究：明代以降を中心として』（第一書房 2000年）、編著に『民族表象のポリティクス：中国南部における人類学・歴史学的研究』（風響社 2008年）、『民族の移動と文化の動態：中国周縁地域の歴史と現在』（風響社 2003年）など



本特集に登場する主要な地名

研究の目的

中国南北の国境地域には多くの民族が居住している。多くの場合、国境線をはさんで中国および中国と隣接する諸国に同一あるいは同系の民族が居住している。本研究は、国境にまたがって居住する民族に焦点をあて、中国の国境地域における諸民族の移動、交流、ネットワーク構築の実態、それら民族の文化の動態を解明するものである。こうした国境を越えて居住する民族についてこれまで中国や隣接諸国の当事者による研究がおこなわれてきたが、それぞれの所属する国家の利害がからみ、主観的になりがちであった。また、政治的・経済的な側面が強調されがちであった。こうした民族は中国では「跨境民族」などと呼ばれるが、中央政府の側からの政治的な色彩を帯びがちである。本研究は第三者的立場を生かし極力客観的な姿勢で研究しようとするものである。

研究の具体的な着眼点として次の点が挙げられる。1. 移動がどのようにおこなわれ、民族の文化や宗教、生活様式、アイデンティティにどのような影響を及ぼしているのか。2. 交流には通婚、経済、文化、宗教的活動など多様な側面がある。それらの実態はどうであるのか。3. 民族間のネットワークの実態はどうであるのか。

中国では人の移動は歴史上絶え間なくおこ

なわれ、民族やその文化は移動や移動先での他者との交流をとおして形成されてきた。国境を越えた移動や交流を研究することをとおして、国境が民族やその文化に及ぼした影響を及ぼしたのかを理解することができる。国境を越えた民族の文化やアイデンティティの動態を把握することで、それらの核心となる部分を理解することが可能になるのである。

検討にあたっては、中国南北の相違や山地民と平地民の相違に留意する必要がある。また対象とする時期は、国民国家の勃興期に国境が画定され人びとの生活空間を分断した時期、中華民国期（1911年10月～1949年9月）から現在までの20世紀を中心とする。

移動の方式、北と南の相違、平地民・山地民との相違

国境地域といっても広大な中国では地域的な多様性が見られる。とりわけ北部において、人の移動は政治の掣肘を受けてきた。中華民国の成立、日本軍の進出、内モンゴルの中国への帰属と、モンゴル族の土地に人為的国境線が引かれて移動が制限されてきた。文化大革命などにもなう動乱のさいに人びとは亡命する形で移住した。人びとは政治に「振り子」のように翻弄されてきたのである。現在も内モンゴルは中国に帰属し、モンゴル国は中国・ロシアに挟まれ、大国の政治的な思惑

に左右されがちである。90年代、モンゴルが民主化されたが、両国の国境の人の往来は依然として制約されている（楊論文）。

他方、南部の場合はより開放的である。中越国境は、19世紀末の清仏戦争で国境線が画定されて以降、中越戦争（1979年）による分断の時期もあったが、中国広西からベトナムへ南下移住したヌン族は壮（チワン）族と交易や文化活動などのため日常的に往来している（塚田論文）。中緬国境では、ビルマの植民地化以降に国境によってタイ族が分断されたが、ビルマから中国へ開かれた交通路にそって交易がおこなわれ、ビルマから上座仏教が伝播し、僧侶や信徒が両国間を往来した。両国の関係の改善以降は移動が活性化している（長谷川論文）。人の移動や文化の伝播に交通路が果たした役割は重要である。ユーミエン（瑶）は中国湖南・広東から焼畑耕作によって南下移動して、東南アジア大陸部諸国に移住し、中国側と双方に分かれて居住している（吉野論文）。中国と東南アジアにわたって居住する山地民の場合、モン族やユーミエンの一部が1970年代のラオス共産化のさいに難民としてアメリカへ移住するなど政治や戦乱の影響も受けている。しかし、移動は政治や多数派民族の圧迫によるものだけではない。このように南北の環境の相違は顕著なのである。

山地民の場合、移動の動因のひとつとして焼畑耕作がある。山地民は、それぞれの国家の多数派民族の影響を受けているが、平地民と比較して多数派民族との間に一定の距離を

保ちつづけてきた。ユーミエンは漢族文化を受容しつつも、その漢族文化を運用して自らのアイデンティティを保持するような共生戦略をとってきた。こうした文化的適応様式の違いがある。

移動にともなう文化変容とアイデンティティ

広西からベトナムへ移住したヌン族は、生活習俗や社会など壮族との共通点が多い。言語などにキン族の影響を受けたが漢字を保持している。一方、中国のタイ族は上座仏教をビルマから受容したが、それは、タイ族のアイデンティティの源泉となっていくた。ユーミエンの場合、タイへ移住した者と中国にとどまった者とを比較すると変差と共通点とがみられる。また自らのエスニシティを表出するさいの文化要素は、移住先のタイでは漢字だが、中国では道教の宗派であるなど環境によって異なる。

移住による文化変容は、多数派民族の影響を受けた南部の場合に顕著である。移住先でのアイデンティティのありようは、他者との関係によって規定されるが、ヌン族やユーミエンの漢字保持は自民族の文化伝統を見直しアイデンティティを再構築するさいの核心となる要素として注目される。

交流とネットワークのありよう

壮族とヌン族の間には交易や親戚・友人による日常的な交流がおこなわれており、そ



ヌン族の祭壇。壮族同様、赤い紙に祖先や神の名を墨書する（ハークワン県ナーサク社）。（撮影：塚田）

こに個人のネットワークが機能している。かねてからみられたビルマと雲南との間での上座仏教の関係者の往来が80代以降に再活性化しネットワークが形成された。ラオス難民としてアメリカへ移住したユーミエンが祖先の故地中国を訪問し、アメリカのユーミエンを介してネットワークが構築され中国とタイとの交流が進められている。他方、「心の自由」を尊ぶモンゴル族は、外的な政治的な力によって分断されつづけてきた。こうした環境にあってはネットワークも政治性を帯びがちである。交流については、幅広い検討が必要である。ネットワークは多方面で構築されているが、個人のレベルを越えて民族内部でどこまで広がりや重層性を持つのだろうか。

人びとの目線から国境を問い直す

壮族とヌン族は、ネットワークを活かして往来をおこなっており、人びとは政治的に画定された国境を意識しながらもそれを相対化している。上座仏教の関係者たちの宗教的実践は国境を越えておこなわれてきたが、彼らの国境に対する目線はどうであるのか、国際的なウェブサイトで動向を知ることのできる現在、どう変わってきたのか、動向が注視される場所である。国境のもつ意味についてそこに暮らし生活圏をともにする人びとの目線から見直す作業がもとめられている。

本研究は、科学研究費補助金「中国南北の国境地域における多民族のネットワーク構築と文化の動態」（代表者：塚田誠之）、機構連携研究「交流と表象」班のうちの「中国南北の国境地域における人の移動と交流、および国家政策」（代表者：塚田誠之）の研究にもとづいている。



女性の服装：タイ、パヤオ県。（撮影：吉野）



女性の服装：広西壮族自治区金秀瑶族自治县。（撮影：吉野）